
捕決闘紋星 —— 烈怒 ——

義雄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

捕決闘紋星 —— 烈怒 ——

【Nコード】

N5550Z

【作者名】

義雄

【あらすじ】

時は幕末、新大陸の軍人がもたらしたのは、開国の要求に伴う混乱だけではなかった。彼らは凄まじく強い、未知の生き物をも連れてきたのだ。 当SSはArcadia様にも投稿しています。

おおきと ゆきなり
大城戸幸成がその後ろ姿を見たのは偶然だった。

——おや、あれは。

確か、隣家の少年だった気がする。

遠く離れているので確証はない。近頃は歳のせいか、若かりし頃より目が弱っていた。

少年は何を考えているのか、街はずれに向かっている。大城戸がそのあとを追うかと考えたのは、もし彼がそうであるなら、自分が呼んでいたはずだと思ったからだ。

——年長者の呼び出しを放ってふらふら出歩いているとは、まったくもってけしからん。

ずんずん歩いていく先は、常磐^{トキワ}に繋がる人通りの少ない街道だった。大城戸の学問所とは全くの逆方向。

これはいよいよ叱ってやるしかない和大城戸が意気込んで歩みを早めた矢先、少年は周囲に目を配った。さして深い考えがあつたわけではないが、直感に従い大城戸は傍の長屋に身を隠した。そのまじつと息を押し殺していると、探るような気配は消えた。

しゅると布をほどく音が聞こえる。気取られぬよう覗き込んでみれば、少年は背負っていた風呂敷を広げていた。日ごろから練習していたのだろう。手早く襷をかけ、赤い鉢がねを締める。それから顔を落とし、目釘を改めているようだった。

身を起こし、大きく息を吸ったかと思えば、駆けだした。

——いかん。

大城戸もそのあとを追った。少年は、すでに草むらへ足を踏み入れている。大声をあげることはできなかった。

年ごろの少年が草むらを往く。一昔前ならなんということはない、ごくありふれた光景だった。大城戸自身も若いころは、度胸試しとして野犬相手に刀を振るったものだ。

しかし、今は違う。日の本の、関東地方の森や野原は、二本差しであっても警戒せねばならないところになりかわってしまった。

浦賀に黒船がやってきた。同時に、それは外来種との戦いのはじまりだった。

新大陸の軍人がもたらしたのは、開国の要求に伴う混乱だけではなかった。彼らは凄まじく強い、未知の生き物をも連れてきたのだ。それは、ポケットモンスター捕決闘紋星と呼ばれる、略称は捕決紋。ポケモン鼻の高い外国人たちはそれらを捕らえ、決闘に用いるという。星条旗を掲げる船に乗ってきたことから、そう漢字をあてられた。日本に元々住んでいる動物も、その一種であると認められるものが出てきている。ここ、マサラ真更の街にもそれらはやってきている。

大城戸はその調査を朝廷から命じられた、新たに設立された捕決闘紋星の図鑑博士である。本来京都にあらねばならぬ博士が何故関東にいるかという、調査のためだった。典薬寮などの前例と異なり、博士の号は複数名に与えられたのだ。

当然のことながら、彼は人よりも遥かに捕決紋の危険性をわかっている。血気に逸りおつて大城戸は舌打ちした。

腰ほどまである枯草をかきわけ、必死に追隨する。視力という、文字通り目に見える形で衰えは感じていたが、ここでも強く現実を突き付けられた。一町（約百十メートル）も走らぬ内に息が荒く

なる。

——歳には勝てん、とは先人の言葉であつたか。

より長距離を駆けられるよう、速度を落とすほかなかった。

不意に 二町ほど先を進んでいた少年が歩みを止める。白刃が陽の光を照り返した。

——見つけたか、あるいは見つかったか。

少年は大城戸に背を向けている。ならば、相手は正面にいるのだろう。真更と常磐をつなぐ道に現れるものは、二種類しか今のところ確認されていない。

自身の吐息と葉のかすれる音とがうるさい。少しでも早く追いつくため、大腿にとにかく走る。

と、そのとき大城戸の前方でがさりと物音が鳴った。ぴたと足を止め、鯉口を切る。暴れる胸を鎮めるよう、ゆっくりと息を吸い込んだ。前方を注視しながら左足を後ろに送る。ぐっと身体を沈め、柄に手をかけた。余人が見ていれば、あるいは猫のようだと形容しただろう。獲物に跳びかかるため、密かに力を溜め込む姿であった。姿を現したのは、身の丈一尺ほど（約三十センチメートル）の鳥。日本古来の雉や鳩よりはずんぐりとした印象を受ける。無論、大城戸はこの生き物を知っていた。

ポッポ
穂穂。

ならば、と剣気をおさめてゆっくりと身体を起こした。極力刺激せぬよう、一丈以上の間合いをとりながらその場を離れる。

穂穂は戦いを好まぬ生き物とされている。今も、大城戸の方に目をやっているが、その視線は好戦的なものではない。何かあれば逃

げ出そうという、被捕食者が警戒する様子だった。

ここで斬りかかっても手ひどく反撃を受けるだろう。そうすれば、前の少年が無事で終わるか、保証はできない。穂孕みがはじまるころには害鳥として駆除せねばならないが、今はそのときではない。

扇型を描きながら移動し、十分離れたと判断した大城戸は再び駆けだす。残るは一町ほど、間に合わぬ距離ではない。

果たして、大城戸は間に合った。

付け加えれば、彼の危惧は的中しなかった。

陽光の下、銀の閃きが空を裂く。それに合わせたかのように、黒い影が飛んだのを大城戸は見逃さなかった。

少年は跳ね上げた刀身を下段に構え直し、振り返る。その瞳に大城戸の姿は映っていない。ただただ、敵を睨みつけている。ひりついた剣気がその場を満たしていた。

ようやく追い付いたとき、銀蛇が閃いた。形容しがたい剣筋は、標的を逸れたようで少年は残身を取ることもなく向き直る。続く構えは八双、地の構えからの摺り上げでは、相手に対処できないと見てのことだろう。

これは少年の剣速が遅いというわけではない。元服を迎えたばかりの年齢としては、異常なまでに彼は強く、風のない林のように静かな構えから、烈火のように激しい打ち込みを見せる。幼いながらも将来が熱望されていた剣童で、同門でない大城戸ですらそれは知っていた。

ただ、それをもつてしても相手は速い。

——相手は小乱田^{コランタ}か。

コランタという言葉は外国より渡来したものであったが、田を乱すこともありその名が定着していた。

田畑でよく見かける獣。鼠とよく似てはいたものの、大きさが違

う。家で見かける鼠の倍、成長きつたものは三倍ほどの体軀で、平均的にはおおよそ一尺と言われている。

とかく素早く、大きさも相まって猫も捕らえぬ害獣であった。その牙は長く鋭く伸び、爪とぎの如く家々の柱をかじっていく。小乱田のせいで崩れ落ちた家屋はさして珍しいものではない。人家の少ない真更ではそうでもないが、江戸に行けば毎日のように何丁目の長屋が傾いたという話が聞けるだろう。

加えて農作物を荒らすとあって、見かけたら斬り捨てる武士も多い。百姓であつても鋤をもつて追い回し、かなうならば打ち殺してしまう。

さらに言えば、先ほど大城戸の前に姿を見せた穂穂とは違い、好戦的だ。

大城戸は声をかける気を失っていた。もはや少年の集中を乱すだけであり、同時に獣相手とはいえ、武士として果し合いに挑むのを邪魔することはできない。かすかに肩の力を抜いて、腕組みして見守ることにした。

静観を決め込んだ彼の前で、少年は油断なく目を送りながら刀を鞘に納め、身体をじっと沈めた。

まさか、居合を使うかと、大城戸は瞠目した。少年の通う道場は、不伝流を教えていたはずだ。だが、あそこでは元服直後の男児に居合の指導をしていない。上背も腕の長さもない時期から教えるべきでない、とされている。少年に居合を見せ、触りとはいえ語ったのは、他ならぬ大城戸だった。

彼は江戸の多摩武志出身であり、剣術もその道場で身につけたものだ。ただ、剣才に恵まれることはなく、逆に藩校で優秀な成績をおさめたため、次第に道場とも疎遠になってしまった。それでも体はある程度覚えているもので、孫の前で居合を実演したこともある。そのとき、その場にはこの少年もいた。熱心に学び取るうという気配を感じていた。だが――。

——付け焼刃で勝負を挑むとは。

見よう見まねで、それも数回眺めただけで模倣できるほど居合は甘くない。一気に鼻白んでしまった。つまらなげな表情で大城戸は推移を見守る。

三度、鼠色の獣が跳躍した。首筋を狙った素早い動きだった。相対した少年は、予想を裏切る動きを見せた。

——なんと。

鞘ぐるみのまま脇差を帯から引き抜き、獣と自分との間に差し込んだのだ。

子乱田は反射的に鞘へ牙を突き立てた。そこからの動きは、いっそ鮮やかであった。大鼠が鞘を噛み砕く前、瞬時に脇差を抜き放ち、一刀の下に首を斬り飛ばした。跳ね飛ばされた頭が、大城戸の足元に転がる。その目は驚愕に彩られていた。

少年は残心を終え、拭い紙で刀身の血を落としてから納刀した。一連の仕草はよどみなく、少年が常日頃から鍛錬を怠っていない証左でもあった。鞘の傷を改めて、ため息をついてから帯にさす。あたりには血の薫りがたちはじめていた。

「大城戸博士、お久しぶりでございます」

それから、はじめて少年は大城戸に声をかけた。我に返った大城戸の口から飛び出したのは、叱り声であった。

「なんじゃ、今の剣は」

「はっ、刀が重かったので相手を捕らえきれませんでした。苦慮の末のことにございます」

む、と口の中で呻いた。己の力量におごらず、勝てぬとみて工夫を凝らすのは良いことだ。だが、それも身についた土台があつてこそ。

「いかにぞ、勝てぬときは退くのも手じゃ。若いころから勝ちのみを追い求めては、そのうち邪剣遣いと呼ばれるぞ」

世は泰平を迎えて久しい。外なる海からの来訪者が時折風をもたらしてはいたが、真更はおおむね平和なものだ。そこまで強さに囚われることはあるまいと、大城戸は考えていた。

しかし、それは剣に魅入られていないからこそ出てくる言葉であつた。

「それも、強さのためなれば」

少年は大城戸の苦言を真正面から撥ね返した。強い意志の宿つた瞳であつた。

その覚悟に何とも言い返せず、大城戸は踵を返す。

——まあ、儂が言わずともよかるう。矢野道場で教われればすむことじゃ。

「とにかく学問所へ行くぞ。渡すべきものがある」

「それは、拙者に捕決紋研礼納ポケモントレーナーになれということでしょうか」

足が止まる。少年の言葉は、まさに大城戸の要件を言い当てていた。

彼は図鑑博士として真更の街に住む子どもに捕決紋との戦い方を講義している。今日は抗する手段を授ける予定であつた。しかし、それを臭わせたことはない。

捕らえた捕決紋を育て、刀を研ぎ澄ますかのように鍛え、また礼儀作法を仕込んだのち、有力者に納める。そうして生計をたてるものも極々一部にあらわれはじめていた。人はそれを捕決紋研礼納と呼び、捕決紋の強さもあつてのことか、嫌悪と畏敬の雑じりあつた目で見てゐる。

大城戸は少年と孫を、それに仕立てあげようというのだ。

「わかつておるなら話は早い。おぬしにはもう少しばかり日が長くなつてから、関東地方の捕決紋について調査してもらふ」

齡十五の子どもにかくも重い使命を託すのは何故か。これは大城戸の意志でなく、朝廷からの命であつた。

簡単に言つてしまうと、今は兵力が足りていない。五年前の黒船から野生の捕決紋は年々増え続けている。武士が安穩と城勤めをしていられる時代は終わったのだ。郷を見てまわる普請組など生傷が絶えない仕事を強いられている。財政難という話もあるが、浪人の任官も昨今は増加している。そんな中、貴重な男手を、重要な調査とは言え割くのは危険だ。この件に関しては大老井伊直弼の横やりもあつたと聞く。

かと言つて、並みの元服を過ぎた少年を旅に出して無事に済むかというところではない。腕が立ち、調べ上げたことをまとめる頭脳も必要とする。その二点を満たすのは真更の街で、大城戸の孫と今しがた血闘を演じた少年、この二人が適任であると判断した。双方ともに長男であつたが、朝廷に指示を仰いだところ、やむをえまいという返答だった。幕府を経由して藩にも話は通つており、捕決紋がいかにお偉方の頭を悩ませているか、それが垣間見える。

「母のことは」

「安心せい、小田原藩から承認はとつておる。ときおり七美をつかわせてもかまわん」

「ありがたきことにござります。ですが、捕決紋砥礼納になることはご勘弁を」

「なに」

驚くことに、少年は辞去した。既に藩からの承認を受けている、つまり藩命に近いことを断ったのだ。

「我が父のことはご存知でしょう」

思い当たることが、無論あった。

少年の父は城中で馬廻り役に勤めていた。三年前、少年が齡十二のとき、彼は死んだ。

その日は藩主大久保忠礼の新しい馬が馬場にやってきた。世にも珍しい、燃え盛るたてがみを持つ馬。それは気性をあらわしたものだ。だったのか、馬は激しく暴れ回った。馬柵など軽く乗り越え、見に来ていた藩主めがけて駆けだしたのだ。父は馬を斬る覚悟だった。実際に刀を抜き放ち、藩主と馬との間に割っていった。それをならぬと押し留めた声があった。父は刀を納め、決死の覚悟で肩からぶちかまし、馬を押し留めることに成功した。その代償は全身への大やけど、それによる死である。

長男がすでにいたこと、命を賭して藩主を護ったということもあって、減石や召し上げの沙汰はなく、むしろ十石の加増があった。それをもって少年の家は百三十石の家禄となったものの、失われた親の命が返ってくることはない。

「拙者は捕決紋を憎んでおります」

「……気持ちはわかる。だがこれは朝廷の命であり、藩命、ひいては幕府の命でもあるぞ」

「調査の話は受けもつす。されど、頼るは己の腕一本とさせていたきたい」

そのとき、音もなく黒い影が少年に殺到した。迷いのない一直線の跳躍、小乱田だ

このような危険地帯で話し込んでいた自分に苛立ちながら、刀を抜く。しかし、少年の刃はそれより早かった。

瞬時に抜き放った脇差が雷光のように奔る。

「しッ」

一刀両断、それ以外に表現する言葉はない。

大城戸は自らの衰えと、無音の接近を察知し、一撃で襲撃者を斬り捨てた少年の強さを知った。斬りあいをいくらかも経験していない若者が動物を斬るとき、若干とは言え身体が固まるものだ。彼にはそれがなかった。よつぼどの覚悟をその涼しげな顔の下に秘めているに違いなかった。

この場を離れることを促し、少年は大人しくそれに従った。その顔を見て大城戸は悟る。もはや少年を止めることは叶わぬと。

寒さの和らぐころ、二人の少年が真更の街を旅立つ。二人は決して本名を語らない。

内、一人は代わりにこう名乗った。烈しい怒りを秘めたもの、海
外の言葉で自らの鉢がねと同じく赤を示す言葉、レッド烈怒と――。

了

（後書き）

もしポケモンの舞台が幕末だったらのお話。最近のポケモンは固体値やら努力値やら複雑だな、よし、いつそそんなものが介入しない話を、という試験的なSSでした。誰得だよホント。

水曜あたりから、誰か思いついてるだろうなーと考えながら書いていたら、信長の野望×ポケモンで。

十歳だと満足に刀も振れないので十五に、他も色々江戸時代を妄想しながら。このあと各地のジムリーダーのポケモンと斬った張つたを繰り広げます、烈怒さん。タケシとカツラに超苦戦しそう。ピカチュウ？ピッピ？プリン？ 全員斬殺してやんよ。

言うまでもなく「とくしゅわざ」使えないので「とくこう」はゼロです。タイプはにんげん、弱点とか今一つとか性格とか、昨今のポケモンチックなパラメータは各自妄想してください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5550z/>

捕決闘紋星 —— 烈怒 ——

2011年12月18日18時49分発行